

「鳩巢小説」の変化と諸本：近世写本研究のために

宮崎，修多
成城大学文芸学部助教授

<https://doi.org/10.15017/9383>

出版情報：語文研究. 86/87, pp.90-104, 1999-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「鳩巢小説」の変化と諸本

——近世写本研究のために

宮 崎 修 多

一、それが「鳩巢小説」か

「鳩巢小説」とはなにか。この問は、世にあるいずれの本ないし本文をもって「鳩巢小説」と称すべきかという疑問に近い。百本存在すれば百の容貌を呈するとき、流布の著しいこうした作品の写本群を前にして、我々はそれをいかに考えればよいのか。さらに具体的にいえば「鳩巢小説」の紹介を請われたとき、いったいどれを底本に採択すればよいのか。その判断のためにはむろん、諸本系統の研究によってひたすら祖本に遡及することを旨とする古き古典学や、僥倖にも数種の自筆稿本と転写本が残存する『春雨物語』研究などとは、別種の姿勢を要求されるであろう。もっとも松田修が「『源氏物語』というものはなくて、『源氏物語』たちがある」(『事実と虚構』)と喝破したように、「原本性格」(池田亀

鑑『古典の批判的処置に関する研究』)の再構築を希求する態度は、源氏研究においてすらその価値を減じて久しいが、源氏はその受容史の長さが異本研究の意味を押し上げたともいえるのであって、一方で「原本」復興の可能性と意義が完全に無化されたわけではないだろう。後述するように、「作者」の「原本」というものが最初から存在しない「鳩巢小説」とは、この点で別次元のものとする他はないのである。むしろこの場合実録体小説の諸本研究に近い努力を課せられると思うが、中村幸彦のいわゆる本文の「生長」「文学化」の過程自体が大きな意味をもつ実録研究ともまた、少なからず問題を異にするようにみえる。それは、「鳩巢小説」というものが受容史の中でその姿が醸成されてきたにもかかわらず、あくまで武家教訓の逸話集としてなるべく忠実に内容を伝承しようとする意識をも残しているからである。換言すれば、よりよき原本遡及を目指す古典的写本書誌学と、すべての異本を等

価値にすくい上げ並置しようとする、読者論の視点を多分にもちこんだ書物論（外山滋比古『異本論』など）との中間に位置する立場で処理されるべきものであると言ってよい。しかし近世写本の場合、この類が存外に多いのではないか。

享保期の朱子学者、室鳩巢が加賀藩儒から幕儒へ任を転じた後、江戸から在加賀の門人らにむけて郵致した書簡の内容を中心に、他者の書簡もふくめて編集しなおし、一種の教訓説話集として纏められたのが世にいうところの「鳩巢小説」である（この説話集の書名は様々だが、本稿では便宜上「鳩巢小説」の通名をもって統一する）。その成立事情、そして諸本の性格について現時点で考えられることはかつて結果だけを整理したが（『鳩巢小説大要』、長谷川強編『近世文学俯瞰』汲古書院平成9年5月刊所収、以下「前稿」と称する）、さらにそれを要約すれば左のごとくであった。

一、「鳩巢小説」は青地礼幹の随筆『可観小説』の最初の二巻を後半に、青地の近親者（前稿では礼幹の兄青地斉賢、号兼山を想定）による編集の部分を前半に置く逸話集であり、成立は後半部が先んじ、前半部がその後に加えられ、一書となったものであろうこと。それは恐らく享保三年四月以降。

二、諸本群は本文の種類から①逸話系②六卷本系③三卷本系（いずれも筆者による仮称）に大別出来、諸系統はおよそこの順に成立していったであろうこと。

ここで注意すべき第一は、成立時から「作者」の存在がきわめて希薄であったことで、むしろ編者の意図が優先されるべきであろうこと。しかもそれが、原翰筆者自身のあづかり知らぬところで、恐らくはその存生中から多様に流布していた可能性が高いことであった。すなわち、素材として使用された原書翰が残っていたとしても、最初から「作者」不在のまま編まれたこの逸話集の場合、それが必ずしも「鳩巢小説」の原本とはいえず、本文の初期形態の一にすぎないという価値しか与えられない特異さを有するということもある。

それでは、現在みるかたちでの「鳩巢小説」の「編者の意図」なるものにどこまで遡りうるのか。しかしそれとて明確には指定できないであろう。前述のごとく、成立は前半と後半とを分けて考慮せねばならず、最初から前後首尾一貫したものとして編まれたものではないからである。その別個に編まれた巻冊がなんらかの事情で一所に保存されていて、偶発的に合体したかたちで写されたものが流布したと思われるので、ある意味では、最初にこの前後二巻が偶然合写された瞬間をもって「鳩巢小説」のはじまりとみなすこともできるであろう。とすれば、「編者の意図」すら全巻を通底しているとは言えず、それも甚だ曖昧であるといわざるをえないのではないか。その曖昧さを宿したまま筆写に筆写を繰返され、なまかな版本よりも海内に浸透していったのが「鳩巢小説」というテキストなのであった。將軍、旗本、大名、帝らのし

くじり話も含む逸事を満載した本書は、木活字でひっそり組まれたことはあったにせよ（弘化四年『集美録』）、近世期では到底出版流通に載せうるようなものではない。にもかかわらず、たとえば徳川実紀にも使用されたことなどを含めて、ここまで流布を許容している事情は、逆に、当時の出版規制の境界もしくはその意味するところの再考を促しているようにも思えるが、それは亦別席に述べるべきことか。

以下、前稿の結果に至るまでの本文変化の類推過程を、筆者の採った方法も含めて特徴別に述べた。前稿と重複する実例があること、また第何話と称する際は前稿に附載した表「鳩巢小説一覽」の条目番号をそのまま使用したことを、予めことわっておく。

二、変化の諸相と系統分類

イ 巻冊章段の改変

諸本間の異同を確認する際にもっともきわだった特色を示すだけに、こうした体裁外形上の問題は調査の時間に余裕のない時など、最初のあたりをつける手段として有効なこともある。事実、前稿でも「六巻本系」「三巻本系」などと巻数をもって諸本群の呼称としており、この側面が本文自体の特性をも物語ることは筆者自身全く否定するものではない。しかしこうした流布甚だしい写本の場合、系統間の交錯、筆写者

の好みなどが大きくかつ幾度も重層的に影響するものであるだけに、必ずしもそれが本文系統を象徴する差異ではなくなることも多いのである。

「鳩巢小説」は『可観小説』の最初の一巻（異本によって最初の二巻）の五十七話を後半に、別の五十六話分の一巻を前半に位置させた、前後二巻（これが二冊であった可能性も高い）計百十三話として数えうるものが最初期の体裁であった。後半部の最初（すなわち『可観小説』の冒頭話）は第57話味方原合戦での本多忠勝の武功咄で、その前に位置する第56話加賀藩士スリ濡れ衣事件の話との間に、巻冊において何がしか切れ目が生じているのが初期形態の名残と、まづはみるべきであろう。逸話系のうち二巻本の体をなしているものなどがその代表で、『鳩巢室先生収録』と題し六巻本系本文を有する上中下三巻本の一群などもここに上巻と中巻の境がある。しかしながら、この切れ目が踏襲されている本はど古い本文を備えているかというところではなく、初期逸話系諸本の中で、この境界を全く無視して五巻本に仕立てられた一群も存在した。その巻立ては、

巻一 72頁101

巻二 102頁113、1頁19

巻三 20頁46、

巻四 47頁59

* ただし第31話は巻四の第55話の次にあり

＊ただし第52話は第56話の前（31の後）にあり
巻五 60～71

と、巻毎には原態の話順をほぼ襲っており、全体を五分冊（あるいは六分冊して）したものに冊の入替が生じた結果、右の巻順巻立てになっていったものと推察されるが、本文そのものは古態を残しているのである。ただし、逸話系二巻本よりはやや修正が加わった箇所もあり、かといって六巻本三巻本両系統ほどは改変されておらず、この五巻本は逸話系の内部で割合他系統との混淆少ないまま派生したものとみてよいであろう。この状況は、あるいはこの五巻本の生成分離の時期が六巻本系の出現以前ということをも物語るものかも知れない。

五巻本の巻二は右のごとく流布本の最後尾に冒頭がつらなる形をとっているところから、二分冊であったものがある時点で合されたことが想像され、もとは六巻本であった可能性もある。しかし、いわゆる六巻本系の巻立てがそれを継承しているかといえばそうではなく、一部類似点もないではないものの、単に全体を六分すれば同じ様な巻立てになる結果的な類似のようであり、五巻本系の直接延長上に位置させるべき系統ではなさそうである。その各々の巻立ての微妙な異同については前稿附載の表を見られたい。すなわち仮に五巻本の前段階にあったと想定される六巻本が今後出現したとしても、それは通行の六巻本とはまったく異なるということでは、

巻立てが必ずしも本文特性を象徴する要素にはならないということである。

さて、章段順番の異同は「鳩巢小説」の場合抄出本や自己編集本を除けば驚くほど少なく、五巻本のごとく冊順の錯誤によって百十三話が円環的に並んでしまったものの他は、ほぼ諸本一致した話順を踏襲している。このことは、諸本混乱をきわめたりとはいえず単一の祖本からの派生なることを思わせ、初期形態への遡及の可能性を示すものでもあろう。遡及することの意義が中古中世のいわゆる古典作品よりも薄いのは前述の通りだが、その初発に近い姿を指定しておくことは、他本の位置付けの際に有効なことはいうまでもない。「鳩巢小説」では、幸いにして『可観小説』の様相がその初期形態を想像する上での屈強の材となる。「鳩巢小説」後半（57話以降）の本文と、『可観』巻一・二の本文との近接度がその尺度となるのであり、それは『可観』があまり流布していないテクストゆえに、原著者青地礼幹自身による本文から余り逸脱していないからである。勿論『可観』の数本間に異同がみられることは森銑三や日置謙がずっと指摘していることであるが、『鳩巢小説』のその比ではなく、『可観』異同箇所を無視してもその他の部分において充分初発本文の材料を提供してくれるものであった。

また、「一、……」「一、……」の箇条書きであるゆえに、「一」字の欠落により二話が一話に連なる現象はきわめて多

くみられ、この結果全体の逸話総数は諸本間で変化するが、それが頻多である以上諸本の前後関係を測定する尺度とすることは難しい。複数話が合体する背景には、内容の類似ということが挙げられるのだが、「鳩巢小説」各話の配列には、全体としては規則性が感じられないものの、数話毎に同一の書翰から抽出された形跡があるために、時に類想の話柄が隣あう部分が生じているのである。反対に、一話が二条に分離されることもあるが、これは「鳩巢小説」本来の語りの特色に拠ることが多い。というのは、一条の中に二つの話題を掲げることが多く、しかもそれが一つの主題や寓意の下に括れる二話ならまだしも、まったく相違する意図の下に二話が続くことも多いからである。例えば第1話日光御宝塔の一件で、前半は町奉行島田幽也の「日光を再興するならまず豊国廟の修理が先」という名言で松平信綱を感服させた話。後半はその幽也の子孫が衰微したのは、幽也があまりに諸悪を見逃さぬ性格ゆえに家臣らが難儀した結果だとする、前半とは対照的な君臣論であった。こうした一条の内容に有機的統一を欠く点は、好意的に解せば話題提供者新井白石や報告者鳩巢らの複眼的思考の反映なのかもしれないが、ともかくこれは「鳩巢小説」話法の大きな特色に数え上げてよい。こうした話を二話に分離させるのは書写者のさかしらというよりは、読者に対する配慮であり、それはどのような諸本系統のどの時期的段階でも起こりうることなのである。

口 識語および書写段階での校訂

古写本書誌学では重要な手がかりたるべき識語も、末端写本が殆どを占める「鳩巢小説」などの場合、個々の書写識語に受容史的意義を見出す他は、本文特性を確定するにあまり意味をなさない。中には伝授されていく識語もあって、最も多くみかけるのは数文字の異同はあるが次のようなものである。

鳩巢室先生所著駿台雜話大行于世余敬服其學識久矣頃獲題鳩巢小説者其書以國字錄多係友朋往返之言間雜以識見無一不興起士氣維持風教者寔為先生手錄也必矣謹繕寫藏諸篋笥附以此言

安永壬辰冬

備前後学井上正修識

この識語は、六卷本系で末尾近くの後光明帝の逸事十話を欠くものに多い。しかしこれが同文で「天明五乙巳年三月浪華 阿部貞良題」と署名されて出現してくるとなると（静嘉堂文庫蔵中村敬宇旧蔵二卷二冊本、三康図書館蔵二卷二冊本など数本あり）、当識語に対する我々の信頼は急激に減退するであろう。「寔為先生手錄也必矣」なるくだりを述べるための単なる權威付けの架空識語か、井上識語の後にあった天明度の書写年記が混同された結果であるのか、ただ、仮に捏造にせよこれが真に安永期に書かれたものであったとすれば、それ以前から「鳩巢小説」なる題が付けられていたこと

の一証とはなりうる。いずれにせよ、六卷本系以外の本にも校訂の結果これが写し込まれていることもあり、必ずしもこれが六卷本系占有であるとは決していえぬが、これを有する本文がその系統に属する可能性は比較的高く、書写識語と違い本文特性の徴象の一であることは間違いない。同文の識語が数本あれば、かくも胡散臭いものながらそれはそれとして本文系統のあたりをつける材料とはなりうるのである。

素性のわからぬ条文が入り込むことでいえば、後光明帝逸事十条の後に、帝崩御の記事文（漢文、作者未詳）が挿入された本が逸話系と六卷本系の一部にある。『可観小説』には見られないので、逸話系が纏められたどこかの時点で付加されたものと思われるが、井上識語があつて後光明逸事を欠く本にはこの漢文も無い場合が多く、六卷本の一部には巻四の末に置かれたものもあり、同じく六卷本の一部や前述『収録』本では巻末に移されている。三巻本ではほぼこれを欠いていた。かくこうした挿入条の有無や位置も、本文系統を推定すべき観点の一とはなりうる。

注記の本文化なる現象は記紀伊勢源氏以来、古典学の古くからの問題であり、原注の変異した様相の一二は前稿でも指摘しておいた。それでは写本の所蔵者または筆写者による本文文化しない付注付記は、諸本確認のための目安となるであらうか。「鳩巢小説」に対する注のうち最も代表的なのが、単独の写本でも伝わる『鳩巢小説評論』などと題される平山兵原

による注釈訂誤であろうが、これは当初から別冊で流布した形跡があるので、これが本文齷頭や章段末尾に記入されているからといってある種の本文系統を示す指針とはならない。所蔵者各自において寓目した兵原注を架蔵本に書加えただけの場合が殆どだからである。それでは、平山注ほど独立性のないものはどうであらうか。名古屋の人見泰の注入りの本はしばしば目にするところであるが、筑波大学図書館蔵『識小編』所収「鳩巢小説」三冊には、人見の注記の他その識語までが写されていて次のごとし。

右以大坂丸屋平兵衛蔵本謄写焉正誤字書眼標將欲得善本以再校

寛政五年癸丑五月廿三日磯邑人見泰識
もつともこの識語が転写された本も数本みかけたが、『識小編』本にはさらに堤朝風の識語が続く。因みにこの筑波本『識小編』は朝風自編自筆のものである。

右鳩巢小説拠一友人之所蔵而書写焉然其本多訛字間亦有不成語今也無可校之本故一従本書而敢無所更改者他日得正本則可校正焉耳

戊午十一月丙子 堤朝風識

原本に語を成さざる所あるにもかかわらず、かくまで忠実であろうとするところは朝風らしく、たしかに人見注本の多くと同じく六卷本系の本文を備えたままである。六卷本系が寛政期には既に存在していたということにもなるのだが、し

かし時代がやや下ると、たとえば京都大学図書館蔵『武道撰萃録』所収二冊本享和三年十月写本の人見注本など、そこには少々三巻本の特徴が散見される。基本は六巻本系であって、も他系統との混淆は享和にしてすでに始まっている様子であり、すなわち人見注があるからといって純粹な六巻本系の本文の温存を期待するわけにはゆかないのである。ただ、そうした三巻本系本文との交錯はこの種に多く、同じ六巻本といっても、人見標注本は三巻系への移行の始まった比較の後期に属する本文と位置付けることもできるであろう。

こうした付注以外に、筆写時の編集と思われる作業の跡をとどめるものもある。本文冒頭に「近藤守重校」と署し、各条話題に即した二三四字程度の標題を掲げ、末尾に堀田正俊の稲葉正休刺殺事件（第79話）に関する「外史氏」のコメントを片仮名文で付載するという特徴を持つ本で、本文は六巻本系の色彩が強い。例の第57話から下巻が開始する二巻本の体裁あるゆえに、これは逸話系から移行したばかりの初期段階の六巻本系統とみられかねないが、何となく人爲が感ぜられ、これはおそらく近藤正斎によって、六巻本に逸話系本文を加味して読みやすくされた校訂本文なのではなからうか。

こうした事例は、本文がいつも少しづつ漸進的な変化を遂げるのではなく、異本間の混合が何等かの機会に大きな規模で行なわれ、その結果本文の大きく変化してしまうことがあるのを物語っている。我々は書誌学者近藤守重名儀ゆえにさせ

る校訂作業が意識的であったと想像してしまうが、当然ながら無記名の筆写者においてもありうる。六巻本系、三巻本系などと大きく分類できるのも、異本間の数次にわたる交錯の結果、曖昧な中間的本文が出来、それが次第に別の特性をもった本文に変容してゆくというよりは、一時点での大幅な改変の名残とみるべきであろう。そして、どの系統かに近接しながらも他系統の要素もみられるといった中間的な本文が多く残存しているのは、幾つかの異本系が出揃った後にさらなる異種の交配が、某系統の本文を基に他本が部分的に混入した形で行なわれた所以だと考えられる。

さらに本文校訂の意識が進むと、他本をもって補正するというよりは、本文そのものの読みにくさをそれ自身において改訂しようとする動きが出てきてもおかしくない。前稿でも紹介したが、内閣文庫蔵『駿台小説』六冊は、書翰体ゆえに混乱する行文を大幅に改めたもので、浜松の藩校克明館旧蔵本。この転写本や、同工の改削本文も存在していたことであろう。

ハ 本文の脱落欠損

本文の脱落のうち最も目立つのは、章段全文を欠く場合である。たとえば、前述六巻本系井上正修識語本では、末尾近くの後光明帝逸事十箇条がすっぽり抜けている本が多く、これは帝室を憚った結果であろうか。三巻本では十条ともに復

活しているのだが、欠落のままの六巻本の幕末から明治の新写本も多く、我々に受容史の問題を提供してはいるが、この例は編集意識の反映ゆえ、本文自体の変化の過程と、それによる諸本の位置付けを試みるにはいささか単純素朴な差異である。むしろ一条の中の部分的な欠損の方が、それを計測する尺度として、よりふさわしい。

『可観小説』にも採られる「鳩巢小説」後半部の第64話板倉勝重・重宗父子の話、まず手近な続史籍集覧本（三巻本系の変種）を翻してみれば、この一条全体が無いことに気付く。もっとも史籍集覧本ならずとも三巻本系では概ね全文欠落し、逸話系六巻本系ではこれを備えるので、この章の有無が三巻本系判定の基準になりうるのであるが、これも後光明帝十話と同じく何等かの編集意図なのであろうか。しかし、流布の逸話・六巻両系いずれも中間部にみえる「此所欠文あるべし」なる注記は、かなり読者を困惑させるものである。本条は、前半が京都所司代の後任を父から推された重宗が、承諾を躊躇しているところへ親友安藤帯刀がうまく説得する話、後半は請諾した重宗が父勝重に裁判の心得を伝授される話で、例によって前後二部構成をとっている。「欠文あるべし」の小書はこのうち後半部の途中にみえるもので、その後半のみの展開は『可観小説』によると次の様であった。

①重宗、父勝重に向い、かかる重責を押し付けるとは「御情なき儀」と泣き言。父、さては諺にいう「あつ

い火子にはね火」なることを知らぬか、と訓戒。

②所司代を継いだ重宗、父に公事の心得の伝授を願う。

③勝重の訓話その一。「鈴木殿の奥州下り」。この譬話で、裁判というものは訴状や事件の表面だけを見ていても務まらぬことを教う。

④同じくその二。「小僧三ヶ条」。この話で、片方の申分のみを聞いて納得させられても、事実関係は判明しないことを教訓。

⑤この二つの教訓を体得した重宗は、父子二代良吏の名声を得た。結語。

しかしながら、逸話系六巻本系では、右の②③を欠き、そこに「此所欠文あるべし」が記入されて④⑤に続く。すなわち欠文の後唐突に小僧三ヶ条の訓話が始まるので、②の部分も目にしない読者はこの話が、いかなる設定で誰によって語られるのか、何の寓意を備えるかを理解できないであろう。しかも、④の末尾で「此二つさへ御意得候へば別に替りたる儀も無之と被申候」という「此二つ」とは③と④の二話を指すのであるから、③を全く欠く通行本では意味が通じない。これが小僧三ヶ条を指すものと解して「此三つ」に変更した本文もみかけるから、事態は錯綜する。

管見のかぎり逸話系以下の本話では欠落のない本文は殆どみられないので、この欠損は後半57話のみが（すなわち『可観小説』冒頭二巻）単独で写された後の、前後首尾揃う際の

なんらかの事故とみてよい。『可観小説』巻二末尾近くの青地礼幹識語では、加賀藩主前田綱紀にみせた後、藩士中村典膳や大野木舍人も写本を作ったというから、礼幹自身と綱紀のものを含めて四本程度は存在したものであった。その内のいづれか、またはその派生本かに欠落の事態あったか、それは定かではないが、現在みる諸本はほぼすべてその欠損本から派生しているものと思われる。ただ、金沢大学蔵『鳩巢伝話』写本一冊（享保元年末より二年初めにかけて書写、蔵印「種徳」）はこの本文損壊をまぬかれていた稀有な例で、現在流布の『鳩巢小説』とは別系統の写本であろう。また、例の第64話前半、周防守を推薦する父伊賀守の話中、徳川秀忠に対して「密夫の首切申様成ものにては無之」という謎めいた表現があり、諸本概ね「此一言如何の義に候や。其節台徳院様にも御合点と見へ申候。数十年考候へとも合点不参候。なぞにて候間とき申候へと被申候。御考御覧なさるべく候」なる注記がある。注記はおそらく原書翰に既に存在したものと思われるが、この『鳩巢伝話』には本箇所行間に朱書で「此謎語解候者在之候。いろは仮名のくたりにて、まをとこの四字の上はやるへふの四字にて候。この頭字をきり候へは、やるへふなきと申事になり候。然は周防守より外はやるへふなきと申儀にて可有之候哉と、中村典膳物語之由」と、見事に謎とさされている旨中村典膳の話として記入されており、他章には新井白石の談話を注記した所もあり、この写本が例の鳩巢

の加賀門人たちの交友圏内で筆写されたものとみることができよう。最初に『可観小説』を筆写した四人の中から流布の欠損本が出てきたとすれば、かかる重要な注記や本文欠落なき本によって補正する方が自然だが、そうでないかぎり、現流布の『鳩巢小説』の原型は、『可観小説』の参照できる範囲でありながらこの四人とはほんの少し離れたところで作られた可能性が高い。筆者が前稿において、原『鳩巢小説』が礼幹の兄青地齊賢側の何者かによって作られたのではないかとしたのは、実はこの感触があったからでもある。ともかく、原『鳩巢小説』が出揃った時に発生していたこの本文欠損は、その後の写本に踏襲されながらも意味不通のため疑問視され、三卷本系統では謎語も含めて難解な章として全文削除されたとみることができないか。この場合三卷本系が他系統よりも先行することを想定するのはいささか困難であろう。このことも前稿で、三卷本系が逸話系六卷本系より後出であると仮定した理由の一であるが、こうした推測は、第64話が本文の円満な『可観小説』所収部分であり、それを零地点として諸本の遠近の計測が可能だったからである。

本文欠落の例の第二は、第32話豊臣秀吉と柴田勝家の余吾庄合戦のくだりで、三卷本系では話の三分の一程度の所で「余除之」と注記し、以下の本文を欠く（統史籍集覧本ではこの部分を他本によって補填せるがごとし）。この箇所、六卷系では概して、

次の廿一日賤ヶ嶽を可致とて 關文 然る所に木本の城には羽柴美濃守殿より飛脚を以此表の様子を大垣え御注進

(内閣文庫蔵『鳩巢小説』寛政十三年写本による)

となっており、中欠の後「然る所」から後文を続ける形をとっている。もしくは欠文箇所を空けずに、続けて「可致とて然る所に」と不自然な繋ぎ方をしたものも多い。逸話系の末端の分派と目される『鳩巢雜記』の一本にはこの欠落部分に□と表現して、これが書写過程において数文字分の虫損か破損かによる判読不能と認定されたいらしい徴象があるが、同じく逸話系の一本には

次の廿一日賤ヶ嶽を可致とて手配りある然所に木下の城には羽柴美濃守殿より飛脚を以此表の様子を濃州大垣え御注進

(架蔵『鳩巢逸話』六冊本による)

と、繋がりの良い本文を備えたものもある。この話の場合『可觀小説』によって原初形態をみる事が出来ぬ前半部分にあるので、「鳩巢小説」諸本間で比較をしなければならぬが、右の傍線部が果して文意を通すための後補とみられることは、かなり疑問に思われる。逸話系の一部に元の状態を残す本があるとすれば、この欠損は逸話系本文が書写されていく過程に生じたものと推測され、しかも逸話系でも欠落本の方が多いところからして、その系統のかなり初期の段階で発生

していたのではなからうか。そして三巻本に至って欠文以下を全部カットしてしまう。筆者が六巻本系よりも逸話系を先行させるゆえんも、一つにはこうした状況からの判断であった。

二 候文特有の文体変化

素材がすべて候文体の書簡であるから、当然ながら書写過程での微細な誤差が各所に生じる。「ニ候」↓「ニ而」「候而」↓「ニ候」あるいは「ニ而」「候者」↓「候へは」「無之」↓「無キ」「可被下」における「可」の脱落、「候也」↓「候や」↓「候哉」といった、文の接続や意味の転換は簡単に発生しうるのであり、これにより意の通じにくくなる箇所も出てくる。こうした誤差の場合、本文の意を汲みながら写す態度の濃厚なほど、意味矛盾などの合理化、修正が筆者側でおこなわれるのは当然であり、そこから新たな本文が派生することも多い。いうまでもないことだが、かかる差異の場合、手元において二本三本を対校する際にいづれの本文が「正」か、いづれが先行するかということはそれ自体で殆ど判別できないことが多く、ゆえに「誤差」「誤読」「誤写」という表現を、意味の通不通をもって個々の本文に不用意に使用すべきではないであらう。

ホ 補足や脚色の意図

意の通じやすさに配慮した結果、それを補う意図で助詞、助動詞はもとより副詞、接続詞、さらには名詞（＋助詞）までが改変される場合があり、補填短縮いづれも存する。第13話は越前松平忠直に対して諫言した杉田沓岐の話であるが、『駿台雑話』にも直諫は「一番鎗よりも難き事」として述べられるこの話柄は、「鳩巢小説」ではむしろ諫言によって和らいだ忠直の性格に焦点がすえられる。逸話系、六巻本系、三巻本系では次のような相違があった。

△例一▽

・越前の一伯忠直卿はかくれも無之暴勇烈の君也

（カリフォルニア大バークレー校蔵『駿台逸話』二巻二冊本、以下逸と略称）

・越前の一伯忠直卿は隠れも無き暴君なり

（内閣文庫蔵『鳩巢小説』六巻一冊本、以下六と略称）

・越前の一伯忠直卿はかくれもなき暴君也

（静嘉堂文庫蔵『鳩巢小説』三巻三冊本、以下三と略称）

△例二▽

・玄関え罷出候家老の内杉田沓岐と申者それへ罷出申候は

只今の御意御家滅亡の左右と奉存候由申候へは（逸）

・玄関へ罷出候家老の内杉田沓岐と申者それは御家滅亡の

左右と奉存候只今の御意と申上候へは（六）

・玄関に罷出居候御家老の中杉田沓岐と申者御前へすゝみ

出申候は只今の御意御家御滅亡の左右と奉存候よし申

上候へは（三）

△例三▽

・伊藤玄蕃と申者去れと申候得共沓岐立上り候て推参なり

玄蕃其方などの役義と此方致す事は違候と申候（逸）

・伊藤玄蕃と申者立れと申候へ共沓岐立上りて推参なり玄

蕃其方杯の役義と此方の致す事は違ひ候と申候（六）

・伊藤玄蕃と申もの立れよと申候へは沓岐立上り推参なり
玄蕃その方などの役義は此方の役柄と相違なりと申候

（三）

△例四▽

・沓岐申候は各様と私義は違申候（逸）

・沓岐申候は各様と私儀は違申候（六）

・沓岐申候は各と私義格別にて候（三）

△例五▽

・ケ様の猛勇の人も惻隠の心の掩ふへからさる事（逸）

・か様の暴悪の人も惻隠の心掩ふへからさる事（六）

・か様の暴悪の人にも惻隠の心掩ふへからさる事（三）

△例六▽

・沓岐を御にくしみ無之候か 東照宮の御子孫様はと有之

と申候（逸）

・沓岐を御にくしみ無之はさすが 東照宮の御子孫はと有

之候（六）

・沓岐を御にくみ無之候流石 東照宮の御子孫様はと有之

と申候(三)

△例一▽△例五▽は、忠直の人物評価にかかわるもので、「暴勇烈の君」(「勇烈」とした本もあり)から「暴君」へ、「猛勇」から「暴悪」への移行が誤読誤写によるものとは思われず、ここには、忠直卿に対する評価がいささかステレオタイプになりつつある事情が作用していないであろうか。そして、こうした表現において三巻本から逸話系へというような反対の変化を遂げることは、おそらく考えにくいように思われる。概して敬称美称に属する「御」「様」「殿」などの対遇表現も、本文生成の時期が下るほど落ちやすい。

△例二▽は文脈の整理。六巻本は、逸話系の「それへ罷出申候は」が誤写か何かで「それは」と約まり、直後の「只今の御意」が浮いてしまったがために位置を後にずらした結果であろうが、かえって不分明になっている。しかし、この実例のごとき変化は六巻本すべてにみられるわけではなく、ほぼ逸話系のままの本も多い。その逸話系と六巻本系の多くがもつ「それへ罷出申候は」という表現が、「玄関え罷出候」の繰返しになることを避けて三巻本系では「御前へすゝみ出申候は」と改め、平伏する耆岐の姿をよりすっきりと描出そうとしているのであろう。元の表現における「玄関へ出ていた家老の内杉田というものが玄関へ出て申上げたことには」とでも直訳するしかないくどさ、たどたどしさは、しかし脳中に想起したことをその順番のまま綴ってゆく書翰などの場合

よくあることであって、これは「鳩巢小説」全体を支配する語勢ともいえる。むしろ近世の人々にとってはこの口調が、ルポルターージュ風の迫真性を伴うものだったのではないか。

実録小説の中でよく架空の候文体の書翰や文書がまことしやかに差し挿まれるのも、こういう効果を逆手に採った手法であり、「鳩巢小説」ではそれが室鳩巢先生の実在の書翰であるという伝説が付随しているために、より信憑性の高い史実ないし秘話として珍重されたのである。もっとも、さすがにその文脈の辿りにくさは長い筆写の繰返しの中で矯めなおされる欲求も時に生じたとみえ、三巻本のごとき改作も行なわれたのであろう。しかしながら、語り口の僅かに巧みになった分、かえって書翰の持つリアルさが後退したことは否めない。筆者が三巻本の他系統よりも後出であるとしたゆえんも、この逆の改変経路を辿ることは可能性として甚だ低いと見たからである。

△例三▽の前半は単に「去れ」から誤写による「立れ」となって、正しい命令型「立れよ」と整えた例だが、後半の改変は逸話系や六巻本系の「此方致す事」の何かを明示して「此方の役柄」とするとき、△例四▽と同じく、よりこなれた表現に改まっている例であり、△例六▽などは強調の結果であらう。

以上の諸例は、二で挙げた単なる字句の相違や、前稿でも例示した事実関係や固有名詞の変化とは別次元の、強調、合

理化、整理その他の効果的表現への指向のなせる意識的改変である。前稿では固有名詞の変化の過程に各系統の変遷が辿れる点のみをみたのであるが、多くは書写段階での改善、補訂、もしくは改悪が入乱れるのであるから、それによる本文系統の確定はできない。しかも、近藤校訂本のごとき注意深いものから、内容への吟味反省の全く感じられない漫然たる写本まで、書写意識も相当に幅をもった「鳩巢小説」であれば、史実や名詞の吟味で本文の性格をきめることは相当危ういと言ふべきであらう。むしろハの項でみた文の欠損や、上述のごとき表現自体の差異にそれをもとめる方が比較的有効かと思われる。なぜならば、その変化の様相に不可逆性をみとることが表記等の面よりも容易だからであり、この種の改変は書写時に地名や人名をいじる頻度よりは少ないとも考えられるからである。

しかし表現の不可逆的变化をはかるべき普遍的尺度をもとめても、空しい結果におわるに違いない。どのような変化でも、その可逆性は全く零とは言い切れないからである。もっとも、△例二▽でみたような、明快な描写となっている三巻本の後に、妙にたどたどしい逸話系の描写が生じるはずがないことを、ここで我々は素材が書翰であることを知るゆえに感覚的に認識しうることも確かなのであり、畢竟個別に処理するより他はないということにならう。あるいは晦渋から明快、難解から平易、平板から強調へといった変化は一見定式

化できそうにも思えるが、誤写誤読から文意不明に陥り、そこから数文字改めて別の本文が湧出するというめくるめく繰返しの中のある一点にすぎない一本文は、明快から晦渋への道程にあることすら多いのである。

三、本文系統とはなにか

いままで筆者は○○系本文なる表現を、いささか無批判に使用してきた。ある本文がある系統に属する本文であることを、あたかも自明のごとくに述べてきたが、それでは厳密さを欠く。順序は逆になるが、ここで「鳩巢小説」における本文系統とはいかなるものかについて簡単に付言しておかねばならないであらう。

筆者のいう逸話系は、後半が『可観小説』の本文に比較的近似することにより、他の二系統よりも初期に属すると判断した。また、六巻本系は三巻本よりも逸話系本文を残すことにより、三巻本よりも早期の系統としたのであるが、それは単に順次に発生した三種の本文とその各々の派生本文の集合をいうのではない。たしかに六巻本系は逸話系の、三巻本系は六巻本系の存在を前提としなければ生じえない部分が多いゆえに、系統間ではさせる生成順を想定しているのだが、個々の系統の内部においてはそうした本文生成の時間性を象徴する尺度たりえないのである。系統内での差異、すなわち、

六卷本系だが多分に三卷本系の要素をもっているのだ、かなり多く逸話系の性格を残した六卷本系本文であるのだといったことは、そうした中間的性格が本文成立の時期を示しているのではなく、各種本文混淆の末に生じた本文のずれの程度を示しているにすぎない。

ここでいう本文系統とは、仮想的に設定された類型である。その系統の別は、いうまでもなく本文各部分の差異によつて判別されるものだが、ある系統の本文特性をすべて満遍なく充たしている一本が現実存在するかというと、それはおそらくない。あつたとしてもそれは偶然の産物にすぎず、結果的にその系統の典型とはなっているものの、系統内での初発本文であるとはかぎらない。たとえば、もっとも後期に発生した三卷本は、その初発の際にいかなる本文を底本として改訂が加えられたかを考えてみればよいであろう。筆者の仮説が正しいとすれば、既に逸話系や六卷本系（この系統には特に様々なヴァリエーションが生じているが）が出揃っており、当然ながら意識的無意識的に限らずそれらの混淆も始まっていたことが想像される。「鳩巢小説」に異文ありと近世期から気付かれていたことは、本文傍記に「イ」本として書込まれているもの、書写識語に別本にて校訂せりと記すものが多くあることから明らかであり、そうした記載がなくとも、書写時に複数本文を斟酌した可能性もなしとはしないからである。ともあれ、仮に混淆型本文を基にしていたとすれ

ば、たとえばある部分は直前の六卷本系、ある部分は逸話系の古態を残しながら、三卷本としての新改変部分も混在するといった本文となるのは必定であろう。先に挙げた△例一▽△例六▽でも、逸話系から六卷本系を経由せずして三卷本系に流入するとき部分もみられたが、だからといって六卷本系を最後出とすべきではないのは、六卷本独自の本文部分から不可逆的に三卷本系改訂本文が生じている箇所が多いからであり、この判断はそうした部分の多寡の比率にかかっているといってもよい。

さらにいえば、筆者は三卷本系の初発の改訂は誰か一人の手により、かなり意識的に行なわれた可能性が高いと推定している。これは改変の内容やそれから類推される意図からの単なる想像にすぎない。しかしその際の改訂箇所と、我々が三卷本系本文の特性とみなしている箇所が、百パーセント一致するとは限らぬことも考慮しておかねばならないのである。いうまでもなくある系統の本文特性とは、その独自の部分を共有する度合いの高い本文の一群が存在することが確認されて、はじめて集合化されうるものであるが、三卷本の場合、初度の改訂後に別の（あるいは複数の）改変が加わり、これがまた現在三卷本の特性として初度と混同して認識されている部分である可能性もあるだろう。すなわち「鳩巢小説」の本文特性とは、単数あるいは複数の改変が加わった後、さらに他本との融合、書写者の恣意によるその一本独自の改変

その他を経た末、その箇所の総合が他本を大まかに排除できるほどの比率をもって残存している場合に浮び上がってくる結果的仮想的なものであり、しかも厳密には明確な範疇を設定できない運命を有するものである。これを前稿では分光器にかけられた光のスペクトルに喩えたが、すべてが連続した分子中にも赤、黄、緑と人間の眼で判断しうる部分をそれと称してみることに、「鳩巢小説」でいえば仮想ながらも〇〇本系と称した領域を予断として設定してみせることは、本文の性格を推測する為の方便として有効なのではあるまいか。もっとも、諸本の調査が進むごとに、また新たな本が発見されるごとに、この領域自体が少しずつゆれ動いてゆくであろうこと勿論であり、またそうならなくてはならぬものである。

すべてが連続の関係であれば集合を形成し、線引きするなど不可能であることは今更いうまでもない。しかしながら我々が日頃「つまらない写本」と称して多くの諸本を切り捨てる、すなわち殆んど感覚的な差別化を敢行しているのはどういう訳か。少くとも「鳩巢小説」のごときをみる限り、諸本すべてを並列させ、相対的価値の渦中に投げ込み、各本のもつ意味を無限に拡散させてしまっても、成立から代を遠く隔てた源氏物語受容ならまだしも、こうした作品の場合さして理解したことにはならないように思われる。これは昨今の異本研究ないし版本研究とは逆の方向性をもつ考え方かもしれない。しかしいささかハイデガーやガダマーらの言い方め

くが、ある程度の先行把握は限り無き解釈学的循環から「理解」への方途たりうるのではないか。筆者が「鳩巢小説」の大量の諸本を処理するために、あえて古色蒼然たる本文系統という称を持出したゆえんは、およそ以上のような観点からである。